



- ◇年頭にあって—SDGsとEDGs 村田 武一郎(NAED 理事長)
- ◇初夢に想う 神剛司(理事/第12期地域P&C塾塾長/地域P&C塾第3期生)……2頁
- ◇波多コミュニティー協議会訪問記 野口隆(理事/奈良学園大学特別客員教授)……2頁
- ◇足元からの地域づくりと広報手段について 今西弘子(理事/地域P&C塾第3期生)……4頁
- ◇「地域の教育力」から生まれるプラットフォーム……6頁
- 井ノ本直三(副理事長/地域P&C塾第1期生) 中辻孝之助(理事/地域P&C塾第9期生)
- 外狩大樹 宮下和之 中窪晋也(第12期地域P&C養成塾生)

年頭にあって—SDGsとEDGs

村田 武一郎(NAED 理事長)

皆さま、今年もよろしくお願ひ致します。

昨年は、天候異変と大規模災害の多発、世界各地での紛争等々、心が痛むことが多い年でしたが、今年は、誰もが幸せを感じられる穏やかな年であって欲しいと願っています。

昨年末に、SDGs(2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2030年までの国際目標)に関する活動が行われている方と飲む機会があり、次のような会話を交わしました。

「日本は温室効果ガスの削減に不熱心だと、COP25リスボン会議で、多くのNGO等から非難されましたね」

「日本は、省エネルギー・省資源に熱心に取り組んできており、CO₂削減はとでも進んでいるが、石炭火力発電所の問題が狙い撃ちされた感があるね。主要国と比べると、化石エネルギーへの依存度も高い」

「世界の国々と比べて、エネルギーや資源を大量に使っていることは事実ですね。米国は論外ですが……」

「日本人の生活は、通貨の高価値を背景に、ほかの国からの収奪で成り立っている。そして、多くの贅沢・無駄を豊かさと思っているのではないか。日本の平均年収は400万円強であるが、年収200万円程度にまで生活水準を落とした方が良いのではないか」

「都会ではそれは厳しいが、自給自足に近い暮らしができる田舎暮らしであれば可能ですね。そうすると、都会から各地域への人口移動が生じ、「国土の均衡ある発展」につながるかも……」

飲みながらの会話の一部を切り取って紹介したもので、論理的なツメも何もないが、いま地球規模の最重要政策課題であり、政府が旗を振り、企業も対応を始めている日本国内でのSDGsが、「国土の均衡ある発展」すなわち各地域の持続可能性の拡大へも展開して欲しいものである。当然のことながら、そのためには、各地域においてSDGsに関する住民参加の議論が盛んに行われ、地域ごとに将来像を明確化し、地域の多様な関係者の「共働」によって地域の将来を拓いていく過程がなければならない。

Sustainable Developmentという言葉は、1992年の地球サミット(リオデジャネイロ)において世界が目指すべき共通概念となったが、誰にとつての持続可能な開発(発展)なのかが不明瞭で、その言葉を使う主体ごとに都合よく使われてきた。そこで、筆者が提唱してきたのがEcological Development(地域が連綿と引き継ぎ育ててきた自然資源、歴史文化資源、生活文化資源、人的資源、伝統技術などの地域資源を活かし、地域の主体性と地域資本によって、また、地域の多様な関係者の「共働」と他地域との連携によって、現世代の満足を充たしつつ生きとし生けるものすべての将来世代へ引継ぎ得る地域をつくること)である。各地域におけるSDGsは、「EDGs」であることが望まれる。当機構の英語名称はNARA Associates of Ecological Developmentであり、NAEDは地域におけるSDGsの先駆者でもあるとも言え、会員各位の地域における役割への期待が増してくるであろう。

年頭にあたり、皆さまのご健勝とご発展を祈ります。また、各地域の地域づくり活動が成果を挙げ持続発展することを祈ります。

初夢に想う

神剛司(理事／第12期地域P&C塾塾長／地域P&C塾第3期生)

年末からSF映画や戦争映画ばかりを観ていました。そのせいか、荒唐無稽な初夢を観ました。多少、前後の脚色はありますが、それは概ねこんなストーリーでした。

ここは、中東の一角。アメリカを主力とする多国籍軍による度重なるテロリスト攻略戦ですっかり荒れ果てた瓦礫の街。神出鬼没で肉弾戦も辞さない命知らずのタリバン兵と最新兵器を駆使して組織的な戦闘を展開するアメリカ兵とが激しい市街戦を繰り広げている。空気を切り裂きながら瓦礫の山を造る爆撃と、動くものを何も許さない銃撃。あちこちから立ち上る白い硝煙。乾き切って埃っぽい黄色い風。それでもあくまでもまぶしい青い空。

ところが、腹に響く重低音と振動で状況は一転する。空は俄かに黒く掻き曇り、地上は暗くなった。太陽はまるで紙の月になる。やがて、空に台風の目のような渦が起こり、その中央から赤黒い雹のような塊が地上に降り注ぐ、と思う間もなく、この塊に触れた物は、コンクリートの建物も戦車も樹木も人でさえ、一瞬で赤黒い綿毛状になり、ボウという音を残し分解して消えた。これこそが、悪意をもつ高度な地球外生物の侵略の始まりだった。

このあり得ない事態に、タリバン兵もアメリカ兵も戦闘などではなくなる。瓦礫の街で遭遇した際に「俺たちが別々に信じる主も地球から人類が減ぶことは歓迎しないはずだ」と両者は力を合わせてこの共通の強敵と戦うことになる。ところが、想像を超える強敵に、緒戦で敗れ、散々な目にあい、タリバン兵とアメリカ兵がチームを組み、共同で戦闘を強いられる場面になる。やたらと無理な攻撃や自爆攻撃をやりたがるタリバン兵を「無茶だ。お前たちは自分の命を軽く考え過ぎている。馬鹿野郎！」とたしなめるアメリカ兵。そんなアメリカ兵を「お前たちは腰抜けだ。そんなに自分の命が惜しいのか！」と吐き捨てるタリバン兵。

やがて、この統制がとれないチームに危機が訪れる。敵の拠点に奇襲をかけたつもりが、罠にはまってしまう。激しい戦闘で劣勢になる中、タリバン兵はとうとう負傷して動けなくなる。それでも、今は味方のタリバン兵を救うためにアメリカ兵は無茶な行動で救出に成功する。しかし手の施しようのない深手を負ってしまう。九死に一生を得たタリバン兵は「無茶をするな。自分の命を軽く考えるな。そう言ったのはお前だろう。このうそつき野郎！」と責めるが、虫の息のアメリカ兵は「馬鹿でうそつきはお互いさまだ。次に会う時は平和な時代にしようぜ……」と言って、タリバン兵の腕の中で息絶える。(夢はここまで)

さて、日頃から「目に見えるものはメッセージ」と信じる私は、この荒唐無稽な夢から、今、地域づくり活動のために何を学ぶべきなのでしょう。そして次の3つに思い当たりました。

- ①(意見が)異なる者同士でも一つになるために、崇高な理念、目的の共有が大切
- ②厳しい状況下で共に行動することは、メンバー同士が親密になる良いチャンス
- ③人は大勢の人々の明日(未来)の元気につながり、心に届く何かをしたい。

さあ、みなさんは、どんな初夢を観ましたか。今年もどうぞよろしくお願ひ致します。

波多コミュニティ協議会訪問記

野口隆(理事／奈良学園大学特別客員教授)

1. はじめに

2019年5月、ホームページで波多地区のことを知り、興味をもたれた高取町天の川実行委員会代表野村幸治さんのお誘いで、島根県雲南市波多コミュニティ協議会会長 山中満寿夫氏を訪ねた。

地域活動では、地域に人を呼ぶ、集客を目指した観光活動がマスコミなどで注目されがちである。しかし、地域の人々の生活自体を自分たち自身の力で支える波多地区のような活動も、地味ではあるが、人口減少社会、過疎化の進む全国各地において極めて有用な活動である。野村さんも、私も感動したので、ここに報告します。

以下の内容は、山中氏との質疑およびいただいた資料をもとに作成した。

2. 地区の概要

◇雲南市は、人口39,000人(2015年)、面積553km²、島根県東部に位置し、松江市に隣接している。2004年、近隣6町が対等合併、雲南市となる。

◇波多地区は、雲南市の南端の旧掛谷町の南端の地区。雲南市役所まで36km 医療や大きな買物などは出雲

市へ行く。

◇波多地区の人口 1959年:1,404人(200世帯) 2017年:296人(135世帯)

山中氏(70歳代)が子どものころ、1世帯に2~3人の男がいて山仕事などに従事。しかし、1965年頃から、広島、大阪へ出稼ぎに行き、そのまま流出。今は、80歳代の人是最も多く、次は60代。高齢化率52%

◇以前は、木炭、枕木、たたら製鉄(大正時代まで)、田畑、育牛が盛んであった。昔、波多村だった頃には、このあたりに役場、農協、店20軒(うち呉服屋2軒)、旅館2軒などがあり、賑わいがあった。出雲への街道でもあった。

3. 波多コミュニティー協議会

◇2008年、住民の発意で地域自主組織ができた。2011年、行政の働きかけがあり、幅広い活動ができる拠点にするため公民館(旧小学校跡)を交流センターへ転換(公設民営)。これを地域の活動拠点として、コミュニティー協議会が指定管理者となり運営している。地域で、福祉、地域づくり、教育の三つの機能を一カ所で果たす(この面では、出雲市が先進地域)。

◇地域自主組織は、自治会+消防団や営農組織など目的型組織とPTAや女性グループなど属性型組織の合体組織。コミ協自体は1982年に設立、今回、波多自治会を改組、それまでの自治会とコミ協の2本立をコミ協に一本化した。

◇職員は、交流センター職員6名(常勤2名、非常勤4名)、うち一人はコミュニティーナース(週一日)。人件費は、市からの交付金と事業収入でまかなっている。

4. 波多コミュニティー協議会の活動

◇県の「中山間地域コミュニティー再生重点プロジェクト」事業を受け、波多いんどりプロジェクトを結成(2008年~2010年度)。3年間勉強:地域を回って全住民ヒアリングを3回行い地区の課題を抽出。…地域持続を決意 県、雲南市、中山間地域研究センター(県の組織)の指導を受けた。

◇その結果、旗彩プロジェクトで、「波多地区振興計画:地域づくりビジョン」を策定

5つの分野で活動する — 防災:防災体制の整備、買物:買物不便の軽減、交通:地域内交通手段の確保
産業:小さな仕事場づくり、交流:自然を生かして交流促進

みんなで、前向きに、むりをせず、楽しんでやることがモットー

5. 防災活動

◇地区はこれまで、大きな土砂災害を体験してきた。

◇波多コミュニティー自主防災会(災害時には災害対策本部)を設立。コミ協会長をヘッドに、雲南市掛合総合センター、消防団と連携。情報伝達と避難誘導の体制を自治会単位で確立
携帯メールの一斉送信。くらしの安全カードを作成:家族の名前、年齢、持病の有無、などを記入したものを冷蔵庫に張っている。防災訓練を毎年6月に実施

◇この結果、住民の中に「何かの時は波多交流センターへ」という気持ちがあった。

6. はたマーケットの開設

◇地域から商店がなくなっていくことに対して、「交流センターの中にお店があれば良いのに」と言う声が上がリ、雲南市からの紹介で、センター内に店を設置する案が出た。

◇全日本食品(株)「マイクロスーパー」へ加盟、ここから仕入れ、毎日配送、粗利20%

◇資金は、ふるさと島根定住財団の補助金、会員の寄付(村から出て行った人も協力)、日本政策金融公庫の融資をもとに、2014年10月開業。翌年、酒、煙草も販売

◇はたマーケットは無人、レジでピンポンと鳴ると事務室から職員が出て行って対応する。

◇売り場面積50㎡、価格は一般小売り店より安い。1日30人のお客、月商120万円。喫茶コーナーあり。

小売り事業は福祉でもある、来店状況で、住民の安否がわかる。また、買物のかたよりで認知症の発見もある。

7. 地域内交通「たすけ愛号」

◇車をもたない高齢者のため、地域内交通を始めた。送迎はセンター職員が行い、時間は勤務時間内。1日5.2人の利用がある。乗合料金は、当初200円、今は無料。利用目的の半数は、はたマーケットへの買い物。マーケット開設後、利用者数は3倍になった。

8. 生涯学習・福祉活動

- ◇ふれあい交流会:年2回、全住民、保育園児から高校生も参加、村を出て行った人たちも参加している。
- ◇喫茶デー:毎週水曜日、100円でお茶うけとコーヒー、安否確認を兼ねている。来なくなったら職員が訪問する。
- ◇にぎわいわくわくサロン:温泉入浴と食事で500円、月2回

9. その他の活動

- ◇波多の素材を産業につなげる活動として温泉活用の交流の場づくり、はたマーケットを活用した地域産品開発などを進めている。
- ◇住みよい波多をPRし、Iターン、Uターンにつなげるため、ふるさとだよりを、年1回(年末)300通発信。うち村外の人へは2,000円(半分は郵送代、半分は寄付)で送付。現在68人が契約
- ◇現在、Iターンは3組。しかし、これ以上人を呼びたくても住む家がない。空き家はあるものの貸す人がいない。

波多地区の活動は、各地の人口減少地域、衰退地域で悩む人々の注目するところとなった。NHK 松江支局の報道が話題となり、2018年度は全国から480人(44回)の視察があった。来月は京丹後市から視察があるとのことであった。

足元からの地域づくりと広報手段について

今西弘子(理事/地域P&C塾第3期生)

貴方は、ご自身が住んでいる町の「自治会費」がいくらなのか認識していらっしゃいますか？ いわゆる奈良府民であった私は、恥ずかしながらあまり意識をきませんでした。ところが、ひょんなことから、自治会の事務局を担うことになり、今は東奔西走の日々を過ごしています。

日々生活をしている居住地域の「自治会」がどのような仕組みで、どのような人たちで運営がなされているのかを知り、我が町が元気であるのかどうかを検証してみようと考えました。

1. 出合いがなければつながらない

最寄り駅から徒歩5～15分の範囲に立地する高台にあり、利便性の高い、古い住宅街で、いわゆる邸宅と呼ばれる豪邸からワンルームマンションまで、いろいろな形態の住居に加えて、看護学校とその学生寮を有する総合病院や宗教団体の施設、タクシー会社の営業所なども抱えている、200世帯程度の中規模自治会です。

人の流入出の一方、旧住民の高齢化が進み、独居老人や老々介護も見受けられますが、自治会の形態は、旧態依然のままであり、住民同士の繋がりはどんどん希薄になっています。そこで、今年度の自治会の活動指針を「お互いが顔見知りになること」と決めました。

2. 住民の出会いの場としての親睦会

親睦会は、毎年行われていましたが、内容は、お酒を酌み交わす宴会や近場へのバス旅行などで、参加者の顔ぶれもほぼ同じで、若い人や新しい居住者にとっては、参加意欲どころか興味さえもたれていないのが実情でした。いわゆる“おっちゃんたち”のレクリエーションの場だったのです。親睦会が唯一の出会いの場だったにも関わらず、十分に機能していなかったと言えるでしょう。

女性や若者、転入者にも興味をもってもらえるような企画が必要と考えて、意識調査も兼ねて全世帯からアンケートを取りました(回収率61% 親睦会への参加の意思:あり49%、なし46%、無回答5%)。

3. 防災勉強会

アンケート結果としては上位ではなかったものの、昨今の気候変動や大地震に備えての心がまえの必要性を鑑みて、防災勉強会として親睦会を開催することとしました。幸いにして、地域P&C仲間間で防災士でもある高岡氏に相談したところ、快く講師を引き受けてくださいました。

しかしながら、ここからが大変でした。皆さん、イベントやセミナー等に参加した経験はあるものの、企画や実施等に関わったことは全くなく、何をどうすれば良いのかからレクチャーを始めなければなりませんでした。

4. 住民の参加意欲を引き出すために行ったこと

これまでの中心的な参加者である“おっちゃんたち”の理解と協力をとりつけながら、新しい参加者、女性や若

者をどうやって引き込むのか？ これには“お母ちゃんたち”の力をお借りして、みんなを巻き込んでいくしかないと考えました。

また、自治会役員(6名)だけではなく、日頃は市民だより・県民だよりや回覧板の配布作業のみの活動をされている班長さん(14の班)にも何かしらのお手伝いをお願いすることにして、緊急班長会を召集しました。

さらに、参加者特典として、価値の高い魅力的な記念品(リュック型非常用持出袋&防災グッズ30品)を用意することにしました。宴会化してしまうアルコール類はやめて、その分、食事内容を充実させました。参加者全員が熱くなって盛り上がるようなゲームも取り入れました。

そして、その親睦会を知ってもらうための広報手段を工夫しました。

5. 伝えるため・理解を促すための広報

自治会で活用できる広報媒体としては、町内各所に設置された掲示板と班単位の回覧板です。当然のことですが、SNS等のネット媒体は使えません。回覧板は早く回すことに意識がおかれ、掲示板は興味がないと殆どがスルーされているのが実情です。紙媒体は、手にとって、目を通してもらわなければ、タダの紙屑でしかなく、読み手には響かないし伝わらないものです。発信者の熱い思いは自己満足でしかないのです。

そこで、できるだけ文字は大きく、シンプルかつフルカラーで、視覚に訴える形を意識しました。手にとって読んでもらえれば、立ち話での話題にものぼり、噂が噂を呼びこむ口コミが期待できます。

◇アンケート結果を詳細に伝えることで現実の住民意識を知ってもらう(他人のことはけっこう気になるようです)。

◇親睦会の意味と意義を理解してもらうための回覧板を作成

◇開催告知は、チラシにして全戸に配布するとともに町内掲示板に掲出(なお、回覧板への誘導を促すために、チラシにはあえて詳細は表記せず)

◇実施の詳細とともに申込書を回覧板にて配布

◇申込書には、自身が所属している班を認識していただくために、班名と班長名を表記

6. 出合いのための演出

お互いを知りあうために、アイランド形式で班毎の着座とし、ネームホルダーを作成しました。このネームホルダーの裏側に、参加記念品の引換券を添付し、終了後の回収作業を軽減しました。

また、出欠確認を手元に残ったネームホルダーで行うことで、受付作業を軽微にし、受付の手伝い者同士や来場者とお喋りできる余裕時間を創出しました。

昼食交流会では、自己紹介の時間をたっぷりとりとともに、隣席同士で盛り上がりながら徐々に全体に波及していくゲーム(100円玉争奪戦)を行いました。ただし、その勝者からのご厚意で戦利金の全額が自治会に預けられ、後日、役所を通して日本赤十字社に、台風19号の義援金として届けさせていただき、参加のお礼状とともに回覧板にて報告をすることで、再びご近所の井戸端会議の話題に上ったことは、言うまでもありません。

7. 結果

これまでは20~30名の参加であった親睦会でしたが、65名もの参加を得ることができました。防災勉強会をきっかけに、自主防災組織の必要性にも気づくことができ、来期の活動の指針に加えることにもなりそうです。

また、おばちゃんたちだけでなく、若い女性や若者の参加が目立ち、おっちゃんたちにも高評価をいただきました。さらに海外からの移住者の参加も大きな収穫だったと言えます。

班長さんを巻き込んだことで、ご高齢の班長さんのご子息やお嬢さま方が、力仕事や当日の受付・配膳作業などをお手伝いしてくださったことは、今までに見られなかった現象であり、大きな成果だったと考えています。

目に見える成果としては、「こんにちは」「行ってらっしゃい・お帰りなさい」という声が聞けるようになったことです。また、粗大ごみの搬出日に、苦勞されている高齢者の方のご自宅まで行って、お手伝いをされる方のお姿も見受けられるようになったことは、とても頼もしく嬉しくなります。

近所づきあいに否定的な方や無関心な方はまだまだいらっしゃいますが、これはどうしようもないことなのでしょう。自治会の役割や機能、日々の暮らしのうえでの必要性を知っていただくための広報活動がまだまだ足りませんね。少しずつでも、一步一步、根気よく進めていくしかないのでしょうね。

今後も、最も近い地域である自治会への目配りを継続しながら、地域P&Cとしての指導と支援を行っていきたいと考えています。自治会活動は、新しい発見があって、けっこうおもしろくて楽しい!!

「地域の教育力」から生まれるプラットフォーム

井ノ本直三(副理事長/地域 P&C 塾第 1 期生) 中辻孝之助(理事/地域 P&C 塾第 9 期生)
外狩大樹 宮下和之 中窪晋也(第 12 期地域 P&C 養成塾生)

1. はじめに (中辻)

2018 年 10 月、宇陀市室生深野、室生を皮切りに宇陀市全域を対象として、毎年 1 月(1 回)、6 月(2 回)、10 月(1 回)に奈良県立大学より学生たちを募集し、地域間・世代間の交流を図っている。大学側はフィールドワーク科目として単位取得の位置づけにあるものの、私自身は地域づくりの実践を踏まえた価値あるフレームワークとして認識し、フィールドワーク支援を行っている。

2020 年 1 月は、宇陀市菟田野地域で開催される「うたの魅力発見体験ツアー・真冬の林業体験」が行われた。主催者である菟田野まちづくり協議会へ協力・支援している中、「地域の教育力」を意識し、中学生との交流を初日に組み込んだ。3 回目となる「うたの魅力発見体験ツアー・真冬の林業体験」(菟田野まち協では 4 回目)において、第 12 期地域 P&C 養成塾塾頭としての立場から、別枠カリキュラム(養成塾で紹介)と捉え、現地との調整の結果、養成塾塾生たち(参加者のみ)の実践材料とする運びとなった。

表 1 奈良県立大学フィールドワーク&「うたの魅力発見体験ツアー・真冬の林業体験」

日程	2020 年 1 月 17 日(金)～18 日(土)
エリア	宇陀市菟田野(旧宇陀郡菟田野町全域)、東吉野村(森林の状況により急速変更)
開催テーマ	◇歴史的背景から菟田野のまちを知る ◇中山間地域及び菟田野まちづくり協議会の活動の現状と課題を知る ◇林業体験への参加を通じて、参加者・地元スタッフとの交流を図る
主催	菟田野まちづくり協議会うたの魅力発見体験ツアー実行委員会
協力	宇陀市、宇陀市自主放送、宇陀市教育委員会、宇陀市菟田野中学校、奈良県建築労働協同組合 NPO 法人メディアネット宇陀、奈良テレビ放送株式会社、宇太水分神社、いまにし、森庄銘木産業株式会社 西井木材、吉野 kikorin 工房、いわはし農村レストラン、宇陀市女性の会菟田野支部、森田邸、宇陀観光株式会社 民家泊 4 家、一般社団法人地域づくり支援機構
後援	宇陀市
参加者数	総勢 134 名
参加	一般参加(宇陀市地域外)37 名(参加申込み 52 名/前日・当日キャンセル 15 名) 宇陀市菟田野中学校 2 年生(教員を含め 40 名) 奈良県立大学 2 回生 3 名、3 回生 10 名 計 13 名(男 2 名、女 11 名) 宇陀市まちづくり支援課 3 名、宇陀市菟田野地域事務所 1 名 宇陀市地域づくりアドバイザー 1 名、地域関係者 31 名、メディア 3 名 一般社団法人地域づくり支援機構(地域 P&C 養成塾塾生 3 名、理事 2 名)
説明会	2020 年 1 月 14 日(火) 16:20～17:50 奈良県立大学 菟田野まちづくり協議会西角副会長によるプレゼンテーション(FW ガイダンスと菟田野ってこんな所?)

表 2 開催スケジュール(菟田野まち協作成)

2020 年 1 月 17 日(金)		2020 年 1 月 18 日(土)		
9:00	近鉄榛原駅南口集合	8:00	林業体験準備作業<菟田野分館>	
9:20	オリエンテーション	9:00 「うたの魅力発見体験ツアー(林業体験)参加 背引き見学 皮むき体験 樹木の伐採見学 昼食交流会(田舎料理を満喫) 製材・木工製品作成工程見学 カナナかけ体験 キノコ菌植え体験 まとめ会<菟田野分館>		
9:30	林業体験準備(のぼり・看板立て) 会場設営準備 ミニ棟上げ体験			
12:00	昼食<国宝「宇太水分神社」>			
13:00	宇太水分神社・カエデの郷“ひらら”・桜街道界限散策			
14:30	菟田野中学校 2 年生との意見交換会 ～10 年後のあなたは、そして菟田野は?～			
15:30	意見交換会 ・県大生からの質疑とまち協からの応答 ・グループディスカッション～菟田野を売込むために どうすれば良いのかを探る～			
18:00	夕食会<しゃもじ>、入浴<あきの湯>		16:00	解散

2. オリエンテーション (中辻)

実行委員長のあいさつから始まり、スタッフ紹介、本日のガイダンスを行った。

奈良県立大学からの参加状況を確認してみると、昨年 6 月「室生深野・ささゆり観賞会、室生西谷地区の 2 日間」、同 6 月「室生地区・ふるさと元気村、菟田野ニュースポーツ大会の 2 日間」、同 10 月「うたの魅力発見体験ツアー・農業体験コラボ 2 日間」からの継続参加者 9 名が含まれ、ありがたいことである。奈良県立大学では、ゼミを除いた



フィールドワーク単位数が、2020年4月以降、8単位から2単位へ縮小することが決まり、参加者減となる傾向にある。学生たちにその旨を尋ねたところ、「単位は気にしていない、各種の体験ができる場所を求めている」ことがわかった。とはいえ、人数確保において、告知日・広報を早めるか、年間プランとして掲示できるよう、奈良県立大学地域交流室と協議する必要がある。

3. 林業体験準備(のぼり・看板立て・菌床穴開け作業) (宮下、外狩)

翌日に向けての準備作業として、「のぼりと看板立て作業」と、「菌床穴開け作業」を行った。



「のぼりと看板立て作業」では、イベント用のぼりや駐車場を示す案内用の看板が、学生たちと、まちづくり協議会のスタッフの手で会場周辺の要所要所に設置された。

「菌床穴開け作業」は、翌日の菌打ち体験プログラムで用いる「ナメコの榎木」づくりの作業である。用意されたサクラの榎木30本に、ナメコの菌を打込むための穴開け作業を学生たちが体験した。榎木1本に10～12cm間隔で穴がジグザグに配置されるように、電動ドリルを用いて穴を開ける作業である。学生たちにとっては、ふだん触れない電動ドリルを用いた初体験の作業であったが、道具の扱いもすぐに慣れると、「これ、めっちゃ楽しいねん！」との声と笑顔が飛び交うなか、実に楽しそうに榎木の穴開けを行っていた。

4. ミニ棟上げ (宮下、外狩)

「菌床穴開け作業」の次は、「ミニ棟上げ」作業を行った。翌日の林業体験での展示物として、製材した柱がどのように家屋に使われているかを伝えるため、家屋の模型を製作するものである。



地元の大工さんの協力ですべて用意されたミニチュアの柱を、まちづくり協議会のスタッフの指示のもと、学生たちが家屋に組み上げていく。柱と柱を組む差し込みの形状や、それを均等に打ち込む金づちの使い方などを教わりながら、恐るおそる作業を行っていた。指導どおりに金づちを打つと、柱どうしが固く締まる様子を目のあたりにし、「なるほど、すごい！」の声が上がっていた。

5. 宇太水分(うだみくまり)神社 (宮下、外狩)

午前中の作業が終了すると、宇太水分神社に移動し昼食をとった。昼食の前に、特別に国宝の社殿の中を参拝させていただき、水分神社の由来や歴史の解説を受けた。



6. カエデの郷”ひらら”・桜街道界隈の散策 (宮下、外狩)

午後は、宇太水分神社からカエデの郷”ひらら”、桜街道などを歩きながら、まちづくり協議会の解説のもと、菟田野古市場の資料館にできそうな巨大古民家などがある界隈の町並みを散策した。廃校になった小学校を活用した施設の、カエデの郷”ひらら”では、木造校舎や児童たちが制作した掲示物などが当時のまま残されており、今では貴重な空間であると感じ入っていた。また、鹿皮を漆で装飾した「印伝」が展示されており、宇陀市が「印伝」の最も古い生産地であることが解説され、学生たちが強い関心を示していた。



7. 菟田野中学校2年生と大学生との意見交換会～10年後のあなたは、そして菟田野は？～ (中辻、宮下)

菟田野まちづくり協議会では、菟田野中学校1年生に、2年前から地域の歴史を年1回ではあるが教えている。

地域の教育観点から中学生との交流を図っている。また、小中学生の間に「地元愛精神を鍛えないと地元を離れていってしまう」という危機感から現実化したのが、今回、目玉として取り入れた中学生(2年生)と大学生との意見交換会である。



大学生を中心に中学生の地域のニーズ・ウォンツを引き出すことによって、将来に至る地域課題対策を見出す作戦である。中学生たちは、大学生との交流の機会がないことから貴重な時間でもあり、精一杯話してくれたのである。初回であったので踏み込んだ状況ではなかったが、これにより、中学生は、地域課題を持ち込むところのできたのである。

菟田野まちづくり協議会は、毎年数回であっても継続してこのような機会をもつことができたことから、地域の教育力向上のため一歩進んだと言える。中学生にとっての(仮称)「菟田野プラットフォーム」が……？。ちなみに校長先生の話によれば、中学時代の社会貢献活動は、現在「カエデの郷“ひらら”」の清掃といった社会奉仕を行っている程度に止まっている。菟田野まち協学生会誕生の可能性を示唆してくれたのかもかもしれない。

表3 菟田野中学校2年生の主な意見(宮下聞き取り)

班	主な意見
1班	<ul style="list-style-type: none"> ◇菟田野の良いところ:自然が豊かである。夏祭りが盛大に行われること。家族みたいに迎え入れてくれるところ。食が美味しい、ホテルがたくさん生息している。星や月が綺麗に見られる。 ◇菟田野の将来像:今のままの自然豊かな状況を残しつつ、ショッピングセンターができるなど、もう少し発展したら良い。 ◇ケーキ屋さんになりたい生徒からは、菟田野のフルーツなどを使ったケーキを作って、菟田野の特産品ができれば良いという意見があった。
2班	<ul style="list-style-type: none"> ◇菟田野の良いところ:伝統行事がある。自然が豊かである。人が優しく温かい。 ◇菟田野の10年後:今よりも高齢者が増え、過疎化が進む。 ◇10年後にどうしたら良いのか:今の若い世代が働きたいと燃える場所があると良い。大きなショッピングモールやゲームセンターや映画館などの娯楽施設があれば、若い人たちも残ってくれると思う。
3班	<ul style="list-style-type: none"> ◇10年後にどうなっていたいのか:スポーツ系の仕事や、外国語で仕事をしたいといった、明確な将来の希望があった。 ◇10年後はどうなっているか:マイナス面では、少子高齢化・過疎化、限界集落になっていくのではないかと。 プラス面では、小学校や中学校のバレーボール部に強いままでいて欲しい。ホテルや自然が豊か。おじいちゃんやおばあちゃんが多いのは良い面でもある。 ◇宇陀の外で就職をしたいが、生活は宇陀でいたいという意見があった。必ずしも宇陀から外に出たいということではないという点が印象的であった。
4班	<ul style="list-style-type: none"> ◇将来どうなりたいか:パン屋、動物園、小学校の先生、平和で健康に過ごしたい。 ◇菟田野の魅力:自然がたくさんある。空気が綺麗。祭がある。ホテルが見られる ◇菟田野の将来:人口が減少して、学校が統廃合してなくなってしまうかもしれない。大型のショッピングスポットが欲しい、バスが無料になると良い、インスタスポットをつくっていくと良い。
5班	<ul style="list-style-type: none"> ◇10年後の菟田野:今のまま自然が豊か。コンビニが増えているかも。 ◇どうなって欲しいか:もっと近くに駅が欲しい、遊ぶ場が欲しい、ユニバーサルスタジオができると良い(笑)。 ◇自分たちの将来は:絶対に菟田野にはいない、都会に住んでいると思うという意見だった。一方で、遠い将来には菟田野へ戻ってくると思うという意見が興味深かった。 ◇県外の人に進めたい魅力:秋祭りは、地域密着度が高くすごく盛り上がる。特産物がないので、ブルーベリー等を使って特産品を売り出したら良いのではないかと意見があった。
6班	<ul style="list-style-type: none"> ◇菟田野の良いところ:自然が豊かである。美味しい団子屋さんがある。 ◇10年後どうなっていたいのか:将来の仕事が菟田野で実現するのは難しい。将来も菟田野に住み続けたいという意見がなかった。高齢化と過疎化が進んでお墓が増えている。 ◇どうしたら菟田野が良くなると思うか:お店がたくさん増えると良い。菟田野のことをしっかり学んで知識として身につけて、それを周りの人に発信できることが大切という意見が出された。

8. グループディスカッションと総評 (井ノ本、中辻、宮下)

菟田野の歴史的背景やまちづくり協議会の活動、現状・課題を念頭に置きながら、夕刻から「菟田野を売り込むためにはどうしたら良いのかを探る～農林業から、商工業から、観光から」をメインテーマに、奈良県立大学生13名が4班に分かれ、まちづくり協議会と地域づくり支援機構スタッフ



が各班に1名サポートとして入り、課題の洗い出し・改善策の検討、さらには、将来像などについて討議を行い、各班から克服・回避策などについて発表があった。

表4 菟田野の発展策（宮下聞き取り/中辻編集）

班	主な意見
A班	<ul style="list-style-type: none"> ◇農業で菟田野を売り込む。 ◇菟田野で売れない・食べられない、地域ならではの特産品をつくる。付加価値の高い特産品づくり ◇キングボウといった特産品は、県外でも需要があるので、特産品の生産を増やすことで耕作放棄地の対策にもつなげる。 ◇高齢化、指導者不足、獣害の課題を解決し、農業を発展させるために、若者を呼び込む方策として体験プログラムをたくさん提供する。 ◇菟田野に大学の試験農場をつくって若者を呼び込み、若者の定住策を講じていく。 ◇指導者の育成方策として、他地域で指導者を育み、他地域から菟田野に指導者を呼び込む方法が考えられる。 ◇獣害対策としては、ジビエ料理の取組みを開発するのが良い。
B班	<ul style="list-style-type: none"> ◇インバウンドや都会の人に向けた観光業を創出する。 ◇ホテルや宇太水分神社での古市場盆踊りなど、季節ごとに自然や伝統文化を体験できる観光イベントを開発する。 ◇耕作放棄地を活用して観光農園をつくり、都会の人が菟田野に通う仕組みを構築し、リピーターを増やす。 ◇これらの観光イベントを組合せるなどして、滞在して体験できる農家民泊を開発し、宿泊客の獲得を目指す。農林業などの体験プログラムを提供し、空き家などを活用して1泊2食7,000円程度の安価な民泊とする。地域の雇用にもつなげる。 ◇観光産業として、地域の特産品をつくる必要がある。木材からアロマオイルをつくるなど、木材資源を活かす。印伝をもっと売り出す。
C班	<ul style="list-style-type: none"> ◇農林業からの視点で考え、価値の創造と需要の創出が大切であるという結論になった。 ◇今までと同じことをしては駄目で、付加価値をつけた農産物や獣害に強い農産物を生産するなど、発想の転換が必要である。
D班	<ul style="list-style-type: none"> ◇どうしたら若者の転出を止めることができるのかという課題に対して、商業施設があると良いという意見が出たが、人口が少ないので、商業施設の経営が成り立たないのではないかという意見になった。 ◇菟田野を売り込むための方策:情報発信が必要である(パブリシティ)。インスタグラムを用いた情報発信として、インスタグラム利用している中学生や若者の意見を取り込むため、意見交流の場として、“まちカフェ”などに中学生が参加しやすい場づくりを行う。中学校にまち協の人が積極的に働きかけて交流の場をつくるのが大切である。テレビやマスコミに取り上げてもらうために、プレスリリースを積極的に行うことが考えられる。

菟田野まちづくり協議会からの要請により、「地域づくり支援機構としての総評をお願いしたい」とのことだったので、まちづくり協議会の日頃からの地域づくり活動、また、今回の世代間交流の企画・開催、学生の実入などについてご苦労されたことに対する謝辞を述べ、地域づくり支援機構の活動状況などについて説明を行った後、下表のとおり、発表内容についての総評を行った。

表5 グループディスカッション総評（井ノ本）

1	農林業については、菟田野地域ならではの特産品を創出し、付加価値を高め、都市部からの需要拡大を図る。これにより、耕作放棄地の減少に繋げる。また、高齢対策については、都市部から若者や家族を集め体験農業を展開するなど、従来の発想の転換を図っていくことが重要である。
2	観光産業については、都市部に住む人たちへ、従来から実施している宇太水分神社(国宝)での盆踊りやホテルが飛び交う地域などを発信し、インバウンドに繋げる。また、観光農園の整備や耕作放棄地の貸出しやゲストハウスの整備などにより、体験や交流に繋げる。
3	若者の転出を止めるとして、地域の中学生やまちづくり協議会の活動とともに自然・景観のすばらしさをインスタグラムやメディアでも取り上げてもらうなど、情報発信が重要である、などの発表があった。

最後に、発表内容はすぐに実現・効果が出るものではなく、奈良県立大学生に、菟田野地域を再発見したことから、今後もこの地域の活性化に繋がるよう、今回の体験をベースに、まちづくり協議会をはじめ、地域との交流・連携を継続するよう要請した。

9. うたの魅力発見体験ツアー・真冬の林業体験（中辻）

寒いけれど昨年より暖かい朝8時から、奈良県立大学による当日準備と受付からスタート。年々参加者が増大と嬉しい響きであるが、一般参加52名の予約から前日・当日のキャンセルが相次いだ。毎年この時期は、天候・風邪によるキャンセルが多く、余裕をもって参加者を確保したのであったが15名(前日7名・当日8名)欠けてしまったのである。

一般参加料金は2,000円と安いのであるが、当初から52名と見込んでいることから、食材・資材・記念品の調達配慮もあって、「今後は、当日参加費持参から振込確認を正式に予約完了と変更しよう」と地域づくりアドバイザーから案がでる始末となった。

また、森庄銘木産業の専務の奈良テレビ放送へのプレスリリースにより取材可能となった。

舞台は、菟田野分館から徒歩で森庄銘木産業へ、社長・専務から「木の説明」→「皮剥き体験」→「丸太切り体験(300gに挑戦!)」→東吉野村へ移動しての「ど迫力の伐採見学」→菟田野岩端地区へ移動して農村レストラ

ン・女性会の皆さまが振る舞う舞森田邸でのおいしい「田舎料理(ジビエ炊き込みご飯、野菜のてんぷら、しし汁など)」を堪能。ここでは奈良県立大学生たちが給仕を手伝う。午後から、吉野 kikorin 工房にて「ものづくり見学」→西井木材での「製材工程見学」→「カンナがけ体験」→「キノコ(なめこ)菌植体験」→まとめ会(300g挑戦結果発表・記念品配布・感想発表)



<宇陀市菟田野「真冬の林業体験」に参加して> (中窪)

肌寒い中、青空のもと菟田野で行われた林業体験に参加させていただきました。このイベントは地域の市民団体、“菟田野まちづくり協議会”主催で実施されています。

地域の林業を生業とされている方々が、今回のイベントを行う上でとても重要な役割を担っておられ、それに加えて地域の方々のサポートのもとスケジュールが進んでいきました。

ふだん経験できない体験イベントに参加されるのはやはり町からの方が多く、それにリピーターの参加者も多くおられることにびっくりしました。それだけ地域住民の、このイベントにかける熱意と想いが強く、参加者に伝わっているのだと思います。

イベントが進んでいる中でも問題点が出た時は、スタッフ同士で即座に相談・連携のもと改善している姿勢は常日頃協力し合える体制ができているのだと感じられました。



イベントコンテンツも、伐採見学や鉋引き体験、キノコの菌植等、受け手として非日常感や楽しめる要素が盛りだくさんで、企画もしっかりと練られている感じがしました。やはり回を重ねる中で、しっかりとアンケートをとり、内容を協議されているのだと思います。

私がその中で最も大切だと感じたところは、地域のプレイヤーの方々が、実践者であり参加者であるということです。自身の役割をしっかりと把握し行動する、それ以外の時は参加者になり、一緒にイベントを体験し楽しむという雰囲気をつくられていることが凄いと感じました。それは、きっと地域の方一人ひとりが“自分ごと”として受け止めておられ、それが実践できている証拠だと思います。

私も、自分の地域で何か“コト”を起こす際は、参加者全員に“ヒトコト”ではなく“ジブンゴト”として受け止めてもらえるような企画づくり・進行に気をつけていきたいと思っています。